



NO.846

2011.12.11

発行所

日本共産党
網走市委員会
網走市北八四三
四三二、四四五八
F 四三二、四四五七

一中と網小、三中と南小の親子給食化に反対!

新婦人網走支部が12月議会に請願を提出

教育委員会は、十月末、一中と網小、三中と南小の親子給食化を公表しました。

網走市の学校給食は、25年前、市民の大きな運動でセンター化を阻止した歴史があり、自校方式で質の高い給食を提供してきました。

しかし、中央小の新築にともない、平成22年から、二中と中央小が親子給食になりました。当時、新婦人の実施したアンケート調査では、市民の94%が自校方式を支持し親子化に反対でした。また、中央小の保護者からは、PTAに了解を得ずに、設計段階で親子給食化することが織り込まれていたのは問題だ等の、疑問や反対の声があがりました。

今回の教育委員会の計画の進め方は、市民や関係学校PTAへの説明が大変遅く、十分話し合いがなされていないこと。市内の中学校が、すべて自校方式ではなく網走市の給食行政の大転換になること。議会に概要が決まった段階で説明するのとこととでしたが、なされていなかったなど、多くの問題点があります。

教育委員会は「安全で安心な給食を提供するためには老朽化した4校の給食室を直す必要があり、4校の給食室を直すには財政的に困難で効率化もやむを得ない」との説明でしたが、国の第三次補正予算で「学校の耐震化」に手厚い予算が付くことにな

る。当初の建築費の市負担が減額される状況が出てきました。市民の中には根強い反対意見も多く、新婦人網走支部が取組中の市民の声を聞くアンケートには、チラシ配布直後から多数のFAXが寄せられ「自校方式は網走の宝です」「アレルギー対策ができるのか、食中毒のリスクが大きくなる」など、親子給食に反対する意見が寄せられています。

新婦人網走支部は、11月に、全ての市会議員と北教組に要望書を送付し、さらに、12月議会に「親子給食方式導入計画の再検討を求める請願」を提出しました。

効率化と財政削減を理由に、これ以上の学校給食行政の後退は許されません。12月議会で、市民の声を反映させた十分な議論が必要です。

共産党議員から市民の皆さんへのお願
電話、FAX、手紙、どんな形でもかまいませんので、教育委員会に親子給食に対する意見を上げてください。

共産党議員から市民の皆さんへのお願
電話、FAX、手紙、どんな形でもかまいませんので、教育委員会に親子給食に対する意見を上げてください。

いよいよ東奔西走

今政治の世界は国民いじめの悪政の連続ですが、スポーツの世界も明暗交錯する昨今です。暗としては、アテネ、北京両五輪の柔道で金メダルを獲得した選手が準性的暴行容疑で逮捕されました。

オリリンピックの金メダルはスポーツの世界では最高の榮譽と敬意の対象となります。それは、より高いところを目指し努力することによって人間の限界を押し上げるとともに、人間として成長につながることも人々の共感をよび、スポーツに新たな感動と値打ちを見いだすことではないか。それを裏切った選手の行為は許されず、10年来、柔道界が進めている、人間教育「柔道ルネッサンス」運動がなんでもあつたかが問われている。

一方、明はロンドン五輪代表選考会を兼ねた福岡国際マラソンで、並みいる実業団選手を押さえて日本人トップの3位に入った川内選手、「タイムも順位も満足していない、2ヶ月後の東京マラソンで再び狙う」とレース後表明しました。

松浦奮戦メモ

田中聡前沖縄防衛局長の「女性の人権を踏みにじる沖縄県民を蔑視する驚くべき暴言」に、沖縄県民をはじめ多くの国民からきびしい批判の声が上がり、一川防衛大臣は翌日に田中氏を更迭しました。

ところが一川防衛大臣は、1995年に起きた米軍兵士による少女暴行事件について、どのような事件であったのかとの質問に「詳しいことは知らない」と答弁したため、一川大臣に対しても更迭すべきとの声が上がっています。

沖縄県議会は2日、更迭された田中前沖縄防衛局長の暴言に抗議し、防衛大臣の任命責任を明確にすることを政府に求める決議を全会一致で可決しました。

沖縄県民は、米兵による少女暴行事件や県民の尊い命が奪われた事件・事故など米軍基地があるがゆえに「筆舌に尽くしがたい苦しみと痛み」が、戦後66年経った今も続いているのです。

そのことを考えない「心無い発言」は沖縄県民の心を傷つけ、怒りが噴出していきます。事件・事故をなくすには米軍基地を無条件でなくすことしかありません。

流水

今「生きていく鳥たちが、生きて飛び回る空を、目を閉じてご覧なさい。こぶしの花が咲くでしょう」▼うた声喫茶は、

11月26日(土)コーヒーショップ「カナ」で行われた。歌唱指導曲「わたしの子どもたちへ」は、茨城に土着した農夫Kさんの生き方(過労のために失明をしてもまだ、土地を耕し生き、暮らしてきた)を、笠木透さんは作詞作曲した。「わが大地的うた」には、この土地に歴史、私のすべてがあり、ここに生まれここに育つたと繰り返して歌い上げている。▼茨城から避難したH夫妻は、この歌を慈しみ、歌い想いを馳せた。

▼A夫さん(甲状腺治療)は10月末、住宅状況と心機能の検査のために5日間茨城に滞在した。網走に戻ったときは安定していた数値が15倍になり、気力脱力している。妻のA子さんは、夫の状況から放射線を毎日浴びる子どもたちへの未来の影響を心痛み、市内に避難して来ている2組の家族と交流をしたいと考えている。▼うた声喫茶に参加したA夫妻のために、66年前に原子爆弾が落ちた、この国の痛みを歌った「折鶴」の歌詞「広島や長崎」を変えて、「(茨城)の街からここまで歩いてきた」と、みんなで合唱した。▼歌声が生きる力になっていくことをこれからも願っている。(て)